



美尻若女将 真弓

夫以外の男に注がれて

空蝉

挿絵／岬ゆきひろ

立ち読み版

第一章	老舗旅館の若女将	4
第二章	連鎖する悪夢——姦通——	48
第三章	壁越しの夫に、この想いは届かない	110
第四章	泡姫二人——女将は肛門で咽び泣く——	156
第五章	温泉宿の夜——散華——	214
エピローグ		270

登場人物

Characters

若桜 真弓

(わかさまゆみ)

老舗温泉旅館・若桜旅館を切り盛りする若女将。黒のロングヘアをアップにまとめ、浅葱色の着物に肉付き豊かな熟れたボディを包む二十八歳の人妻。

堂本 キヨシ

(どうもと きよし)

若桜旅館と同じ旅館組合に属する、新興ホテルチェーンのオーナー。ビール腹に禿頭が目立つ五十路間近の中年男。歴史ある若桜旅館と豊満な真弓の肉体を狙っている。

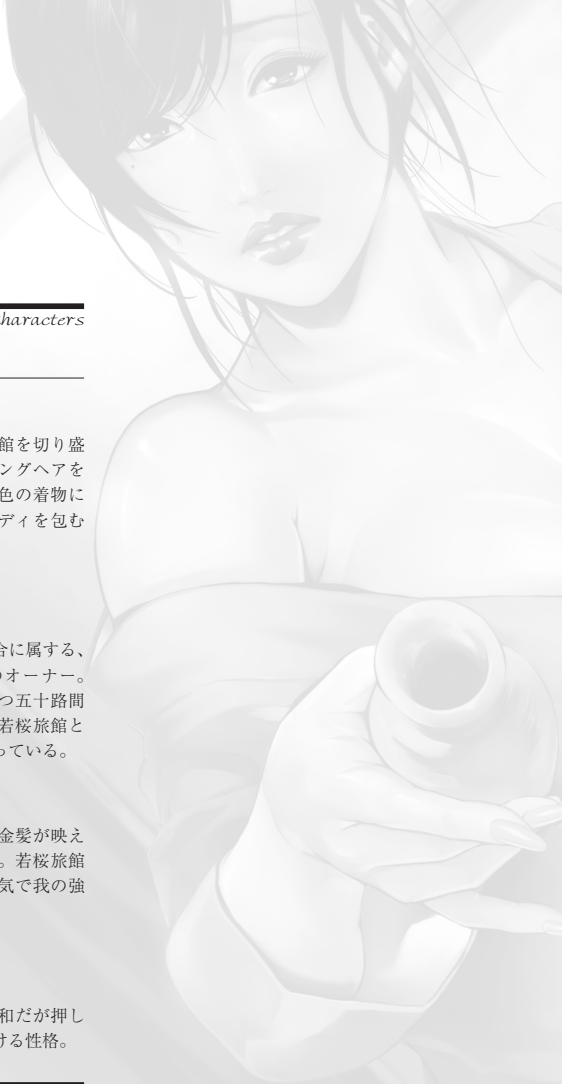
ナミ

ゆるふわウェーブーな金髪が映える十代の享乐的な少女。若桜旅館に宿泊している。勝ち気で我の強い性格。

若桜 護

(わかさまもる)

真弓の夫で婿養子。温和だが押しに弱く、頼りがいに欠ける性格。



第二章 連鎖する悪夢——姦通——

1

ナミが友人だという男連中を連れてきてから、三日が経った。

「……はあ」

苦悩の色を滲ませて頭を抱えた女将が畳敷きの執務室で一人、嘆息する。悩みの種は無論ナミと、その友人達だ。連中は真弓が予測した通り、すでに幾つものいさかいを起こしていた。

彼らの泊まる部屋が騒がしいと、他の宿泊客から苦情が寄せられるのは毎日の事。日中とはかく夜遅くまで続く若者連中の喧騒ぶりに、年嵩の者が多い常連客の辛抱も限界に達しつつあるのが実情だ。

ナミ達の留守中に部屋に清掃に入った従業員からは「室内の汚れ方が酷い」との報告も受けている。

何より真弓自身、部屋の前を通りかかった際に中から漏れてくるいかがわしい声を

耳にしてもいた。

漏れ聞こえてきた鼻にかかったような女の鳴き声と、男達の荒く乱れた吐息。そして障子越しにも艶めかしく映った、絡み合う男女のシルエット。覗き見こそしなかったが、ナミと男達が室内で何をしていたか、わからぬほど女将も初心ではない。

以来、ナミと男連中の部屋への茶や食事の配膳は必ず真弓自身が単独で行うようにしている。事が噂となつて広まらぬようにと考へての対応だ。

「護さん……。早く、帰つて来て」

弱音を吐いては駄目だ。わかっているながら、留守中の夫の名を呟く。悪い時には悪い事が重なるもので、ナミが男友達を連れてきたあの日、昼食時となつた頃合に、組合の会合に出ていた夫から「急な出張が決まつた」との電話連絡があつた。

かねてより提示していた町興しの案が採用され、陣頭指揮を執る事になつた——。そう語る夫の声が珍しく昂揚した様子だつた事が、強く真弓の印象に残っている。

（護さん、最近はいつも疲れた顔してたから。だから頑張りが認められて嬉しかったのよね、きつと）

それ自体は喜ばしい事だ。けれどそのために夫は帰宅する事なく四泊五日の出張に出ってしまった。

あちこち視察するのに忙しいようで、電話は毎晩かかってくるものの、護の方が一方的に喋ってすぐ切れてしまう。話す内容も業務連絡めいたものばかりで、夫婦としての会話ができぬまま。幾度か入浴剤の件を切り出そうと口を挟んでみたものの、その都度「疲れているから。話は帰ってから聞く」の一点張りで電話は切れてしまう。日中彼の携帯に電話をかけても出てくれない。

(本当に、疲れてる……だけ?)

話したくない事、聞かれたくない事があるから、わざと電話に出ないのではないか。不通の電話音を聞いたたびに、勘繰りたくなってしまう。

後の事態收拾を迅速に行うためにも、気持ちを整理してから尋ねるのがいいかもしれない。そう考えもしたが、ナミ達の起こす諸問題の後始末に追われて、気持ちの整理どころか、歯痒さに焦れる間すらないのが現実だった。

「……そろそろ、行かなくちゃ」

とにかく今は、身体を動かしているの方が気が紛れる。部屋にこもっては、暗い方向に意識が落ち込むばかりだ。

壁時計の示す時刻が深夜一時に近づいているのを確認してから立ち上がり、真弓は事務部屋を出て廊下を進む。ナミ達の部屋は今日もまた、菓子屑や飲み物の空ボトル

など散乱しているのだろう。

(障子を破かれたりしてなければいいけれど)

惨状を想像して顔を曇らせた途端、自然とまた深い溜息が吐きこぼれる。女将は重い足取りで、約束の時間に間に合うよう、女湯へと向かう――。

2

こうして深夜に浴場を貸切開放するのも、四日連続となる。幸いまだ他の客や従業員に露見してはいないが、いつまでも隠しおおせるものではない。

(でも、今日で最後。明日、護さんが帰ってきさえすれば。もう、こんな思いをしなくても済むわ)

帰宅した夫の口から入浴剤の件について聞く事ができたなら。いかなる答えがもたらされるにしろ、ナミ達の無茶難題に振り回される事はなくなる。

ナミ達を贖する事で生じる、他の宿泊客に対しての申し訳なさ。必要以上の負担を強いる事になっている従業員みんなへの申し訳なさ。隠し事をする事で感じる心苦しき。そうした苦悩の全てから解放されるのだ。

入浴剤混入が事実だった場合に、また別の辛苦がのしかかるだろう事は覚悟している。その上で今、真弓は明日夕刻の護の帰還を心待ちにしている。

「早く、会いたい……」

とにかく、今日さえ乗り切ればいいのだ。心身を鼓舞して、浴場へと続く扉を開ける。前もって鍵を開けておいた戸をくぐり、女湯側の脱衣所へと歩を進めれば、想定外の物が女将の目に飛び込んできた。

「何……これ、どうして」

脱衣所に複数、男物の衣服が乱雑に脱ぎ置かれている。畳みもせず適当に放り込まれたために木造りのロッカーから端がはみ出ている衣服。しまう事すら放棄して床に脱ぎ捨てられている衣類もある。その内の幾つかに、真弓は見覚えがあった。

「——っ、失礼いたしますっ」

足袋だけ急いで脱ぎ、大浴場へと続く硝子戸を開く。中に踏み入った真弓の耳に、真っ先に飛び込んできたのは、ひたすらに甘い——女の声。

「あはっ、そこ、いいイ」

少しも抑える気がないらしいナミの大きな嬌声と、蒸れた熱気が、百六十平方メートルほどの広さの浴場中に充満していた。

湯気漂う大浴場内においてもひと際目立つ、一塊になった集団。その中心に、声の出元たる少女の姿があった。

「お客様、困ります！」

状況を視認した瞬間から、女将の胸に純然たる怒りの感情が湧く。

部屋の中でする分には、他の宿泊客に迷惑をかけない限り口を出さないつもりでいた。だが自身が生まれ育ち、日々誇りに感じている宿の要——温泉での行為とあつては、看過できない。

真弓が震える爪先をさらに前進させると、全裸の男複数人と絡み合う、やはり全裸のナミ、卑猥なその有様が、視界に鮮明に映り込む。

「くおつ、裏筋の舐り方がいいっ……」

「マ〇コの中のうねりっぷりも、たまんねえ」

「手コキだけでイクのは勿体ねえ。けど、あぁクソツ、我慢できねえっ」

裸の少女を取り囲む男の数は、四人。いずれも女将の苦言を無視して、嬉々とした表情で肉の欲を貪る事に熱中していた。

一人が四つん這いのナミの尻を後ろから抱えて強く突き、もう一人がやはり激しく口腔を穿っている。残りの二人は左右に分かれて立ち、少女の手に剥き出しの男性器

を握らせていた。口々に下劣な感想を述べながら、各々好き勝手に腰を振り立てるその様は、さながら飢えた野獣。

あまりに明け透けな性行為を見せつけられ、浴場に入ったばかりだというのに、真弓は立ち眩みに襲われた。よろめくおんてゆうしや闖入者を面白がり、男達の内うちの二人が手を振る。

(よ、四人といっぺんに、しているの？ そんな事……信じ、られない……)

セックスは、愛する相手と二人で行う営みのはず。二十八年の人生で育んだ真弓の貞操観念が、目前で繰り広げられる光景を「異なる物」として強く拒絶する。

「あは。ちよつとオ。まだ出すには早いってえ」

驚愕する女将をよそに、ナミが余裕の表情で手にしたペニスを扱き立てる。

「おい、こつちも忘れんでくれよ……なっ！」

「あひ……っ。やったな、この。仕返しに、ンッ、ンー……ッ。どうよ……って聞くまでもないよねえ。中でチンポ、ビクンビクンさせてるし……」

尻に激しく腰を打ち付けられて甘く鳴いたかと思えば、一転嬉々とした表情で膣を締め、不規則に男根を締め上げてみせる。

性行為そのものを楽しんでる様子の男女の在り様が信じられず、踏み入った女将の足がそれ以上進むのを拒むように重たくなった。

「お。遅いぞマユウ」

折悪く、男の尻越しのナミの視線が、棒立ち状態の若女将を捉える。

マユ。昨夜辺りから急に使われだした呼称だ。馴れ馴れしい少女の呼びかけを受け、反射的に真弓は目を逸らしてしまった。

「なあにボーっとしてんのお？ ひよっとして、チンポに見惚れちゃつてたとか？ 欲求不満だもんねえマユってば」

「ち、違いますっ。おかしな事、言わないで……」

そんな風に言われると、かえって意識してしまうのではないか——。耳まで真っ赤になつて否定したのと裏腹。若女将の移ろいでいた視線が、改めて男女の結合部へと注がれる。

ナミの股と口腔、両手の内に抜き差しされている、計四本の男性器。いずれも体軀に恵まれた男の腰が引けるのに合わせ垣間見える肉幹。そのどれもが忌まわしい精气に満ちて張り詰め、若い牡の獣欲を誇示するようにけたたましい脈を打っていた。

（アレは本当におちゃん、ちん……なの？ だつて、護さんのはもつと……）

夫の物は、もっと大人しい印象だ。若者達のように急角度で反り返っていないし、一見してわかるほど青筋を浮かせてもいない。幹周りの太さも、垣間見える造形から

予想される全長も、一回り以上若者達の物の方が大きく思えた。

愛情というスパイスを抜きに考えても、彼らの男性器は禍々しい。反り立ち女体を貫く様は、さながら肉の槍を思わせる。

「とにかくっ。お風呂場でのそういつた行為は困ります……」

再度の中止要請は、甲高く響くナミの嬌声によって掻き消された。仮に聞こえていたとしても、獣性に突き動かされている男女の心には響かなかつただろう。

「へへ。何？　じつとこつち見ちゃって。女将さんも混ざりたいわけ？」

「俺らなら大歓迎よ？　いくらナミのテクが極上つつつても、手コキより、そりやマ○コにぶち込みてえって」

意見を無視される悔しさに唇を噛んでいただけだ。それを、顔がまだ赤らんでいたせいで、欲情を堪えていると曲解された。ナミの左右の手それぞれにペニスを握られている男二人が真弓に顔を向け、粉をかけてくる。

今にも襲いかかりそうな好色な形相に見定められ、三十路前の心身が緊張を孕む。

「ご、誤解です。来ないで！」

二歩三歩後ずさりすれば、追うように男共も二歩三歩。ナミの手からペニスを引き抜き、和装の女将に向かい迫ってきた。

「おう、やれやれ」

「後でスワップしようぜ」

ナミを挟んで犯す二人が囁し、煽り立てる。

（ひ、人を呼んで……）

深夜という時間帯。宿泊棟とは離れた場所である事を踏まえれば、助けが来る可能性は限りなく低い。浴場内は声が響く分、外に漏れ伝わりにくい構造にもなっていた。そもそももうすぐ襲い来る男達に口を塞がれてしまえば、終いだ。

逃げるにしても、若い男達の追走の方が確実に速い。

（それに、ここで逃げたら彼女が何をするか。護さんの画像と動画をばら撒いてしまいかもしれない。まだ護さん本人に確認も取れてないのに……）

すがるように視線を向けた先で、少女が男に尻を突かれた。

「ソッ、ア……ッ、ソフ……なあに、マユウ。泣きだしそうな顔でこっち見て。こいつ等じゃ、お気に召さないって？」

甘ったるくふやけ、けれど確実に冷たい嘲りを含んだ声音が浴場内に反響する。

「は？ おいおい。傷ついちゃうなあ」

「どんだけ面白いよオバさん」

煽られた男二人の剥き出しの勃起が、怒りと苛立ちを充填していつそう凶悪な角度となり、反り立っていた。左右に分かれて逃げ場を狭めるようにじりじりと迫り来る、二頭の牡に追い立てられるまま。とうとう真弓は壁に背をつけてしまった。

「和服ってどうやって脱がしいんだ？」

「面倒だし、はだけさせてぶち込みやいべ。半脱ぎのがそそるっしょ」

交互にプランを口にして、昂揚した肉棒を弾ませる。肉の欲剥き出しの男根から目を逸らそうにも、すでに包囲網は伸ばした手が触れるほどの範囲にまで狭められている。視線を落とせば肉棒が、上げれば下卑た男達の顔が映り込む。目を閉じるのは貞操を放棄するのと同じ事だ。

「うう……護、さん……っ」

追い詰められた供物が怯えた目を泳がせ、この場にいない夫の名を呼ぶ。助けに来てとすがるのではなく、苦境を乗り切る支えとして紡がれた、最愛の人の名。

悲痛に響くその声に何を思ったか、不意にナミが口を挟んできた。

「ねえ、マユ。明日あたしに付き合ってくれるなら、今晚は許してあげてもいいよ」
「え……？」

予想外の人物からの、あまりに唐突な助け舟。身体の強張りはずかしく解けたもの

の、まだ心の不信が残っている。応じてしまつて本当に大丈夫か。不安を秘めつつ見つめた真弓の瞳を、全裸少女の火照り顔が出迎える。

「ちよ、ナミ。何勝手に言ってくれちゃつてんの」

「俺らもう準備万端ビンビンなんすけど!」

「オバさんより、あたしのが絶対具合イイつて。テクも断然上だしネ。……それに、このオバさん結構頑固だよ。面倒起こして逮捕とか、嫌っしょ?」

「んな下手あ打たねえよ……」

不満くすぶる男達だったが、「逮捕」という言葉に尻込みし、渋々といった顔で包囲網を解く。

「あ……ああつ」

緊迫の事態から解放された若女将は脱力し、ぺたりとその場に尻餅をついた。濡れたタイルから伝わる水分が、着物に浸透してジワリ。湿り気に侵された臀部がへたり込んだ状態で小さく震える。

その様を未練たらたら眺めつつ、男達は再度ナミの左右へと群がった。

「助けてあげたんだから約束破らないでよね。……あむ」

従った褒美とばかりにナミは戻ってきた二人の肉棒を左右の手で握るなり、口元へ

と誘い、咥え込む。

「うお、やつぱすげ……。年下の癖に、どんだけ経験積んでんだよお前」

「おほっ、玉揉みと同時のバキューム最高お」

亀頭を啜る少女の頬が凹み、鼻の下が間延びして映る。冷静に見れば不細工でしかないその様が、なぜかこの時真弓にはこの上なく卑猥な光景に思えてならなかった。

「あ。それと。今日は最後まで全部見てく事。わかった？ それもできないなら、マジでこいつらの相手してもらおうから」

受諾も拒絶もせぬ内になし崩し的に結ばれた約束を胸の内で嘯み締め、若女将は猥褻行為を見届ける覚悟を決める。

(早く、終わってちょうだい……お願いだから、早く……)

早鐘のように心臓が脈打つ。息苦しいのは、居た堪れなさに苛まれているからだ。そう解釈した真弓の腰が、もじつき、床をくねくねと掃き始めていた。己の内より染み出す感情と感覚の狭間で揺れながら。

「は、あ……あ……」

知らず知らず、ネットつき爛れた吐息が漏れ出てゆく。

熱に浮かされるようにして過ぎ去った一時間は、実際以上に長く、辛く感じられた。

翌日の昼過ぎ。午後から休みを取った真弓は、県庁所在地の市街へと繰り出していた。無論、昨夜に約束した相手であるナミの先導に従っての事だ。

「ほら、こっちだよ」

自動改札を通り抜けるなり、ナミが追隨する真弓を待つ事なく進みだす。

「ちよ、ちよつと待つてください」

少女は冬だというのにホットパンツ姿で、恥じらいもなく大股で闊歩する。一方の真弓は和装のために歩幅が制限され、自然と駆け足を余儀なくされていた。

「一体、どこへ行くんです」

約束通り同行しているのだ。さすがに教えてくれないだろう。わずかに息切れしつつ、真弓が前行く背に問いかける。

「ん？ フフ、あなたにおあつらえ向きの場所よ」

地下の駅舎から地上へと続く階段を上りながら、半身で振り返った少女がほくそ笑む。含みある口振りで翻弄し、愉しんでいるのだ。

「ですからそれはどういふところかと聞いて……あ。ま、待って！」

はぐらかしたままさらに歩幅を広げた少女の背を草履履きの脚で追う事しか、今はできない。悔しさも不安も嘔み殺して、真弓はただひたすらに追いつがった。

やがて繁華街を通り過ぎ、徐々に派手派手しい看板が増え始めると、よりいっそうの不安が女将の胸に巣食いだす。

「どこへ向かっているのか、教えてください！」

少し強めの口調で訴えた直後に、ぴたりとナミの足が止まり。

「ほら、あそこ。話はつけてあるからさ。ちやちやつと面接受けてきて」

一軒の白い建物を指差し、早口で捲し立てられた。

「面接、つて。どういう事ですか。私には女将の仕事が……」

建物の様相をろくに確認しないまま真弓がナミに向き直り、第一の疑問をぶつける。

「夜の空き時間があるつしよ。それを利用すればノープロブレム」

「そんな事言われても……困ります」

アルバイトにしろ。パートにしろ。兼業の意味はない。する理由もない。

（この子はどうして急にこんな事を言い出したの？ 訳がわからないわ……）

一体どんな店で働かせるつもりだったのか。どう断ったものか思案しつつ、初めて

しっかりと店舗を視認した。軒先に掲げられた派手な看板に書かれている店名は——
『ソーブランド・サクラ』。

どういった業種なのか一目瞭然の店名に、驚愕した女将の身と心が強張る。怖気と共に真弓の胸中に巣食っていた不安が一斉に噴出した。

「ナ、ナミさん。あの店って……!」

「そ。泡姫になって、稼いできてよ。んでもって、あたしに紹介料を寄こす。店のオーナーとは、もう話ついてっから。マユは希望の勤務時間だけ伝えればオッケーっわけ。簡単でしょ?」

信じられない。そう思う事の連続に、開いた口が塞がらない。学生の身分でいかがわしい店のオーナーと繋がりがあられるらしい事もそうだし、身体で稼いできて、その一部を寄こせなどと、発想が信じられない。他人に向かいよくも平然と言えたものだ。(いくら入浴剤混入の疑惑映像が手元にあるからって、どこまで要求するつもりなの。この子には、罪悪感というものがないの?)

横柄さを崩さぬまま、返事はイエス以外ありえないと確信している。優越感と享楽感情を多分に含む年下娘の表情を見るにつけ、真弓の内に抑えきれぬ感情が渦巻く。マグマの如く煮沸する激情、怒りを込めた言葉が、自然と舌に乗ってこぼれ出た。

「——お断りします」

言い淀んでいては、少女を勢いづかせるだけ。ここ数日短いながらも接した経験則から判断し、きっぱりと拒絶の意思を伝えた。

「は？ 昨日、あたしの連れにパコられかけてたのを助けてあげたよね。それに会った初日に、イカせる途中で逃げたのも許してあげた。なのに、言う事も聞けないって？ ちよつとあんた、我儘が過ぎんじゃないの」

——どっちがよ！ 急速に機嫌を損ねて凄む少女を前にして、そっくりそのまま言い返したい衝動に駆られる。事を荒立てるのは得策でない。けれど先だって彼女が発したある言葉——ただ一言が心に引つかかり、矛を収める事ができなかつた。

「私におあつらえ向きって、どういう意味です」

「泡姫に女将さん。風呂繋がりでちようどいいじゃん。それに根が淫乱のあんたには、ぴったりの職場でしょうよ！」

想像通りの言葉を唾と一緒に吐き捨てた少女に対する怒りが倍増する。胸を焦がす苛烈な憤怒の炎が強まり過ぎたために、かえって言葉を失くした真弓の唇が空回る。

「チッ。じゃあ、もういいわ。例の写真と動画、週刊誌に売りつけてやるから」

ナミの方もよほど頭にきているのか、すでに恫喝の意思を隠そうともしない。

「たかがソーブ程度で渋りやがって」

娯楽目的の金欲しさに、人はこうも酷薄になれるのか。性的な行為に抵抗を覚えな
い少女の物差しと理屈が、真弓には理解できない。したいとも思わなかった。

「……もつと、ご自分の身体を大事にしたらどうです」

呆れ混じりに論じたものの、ナミが聞き入れるはずもない事はわかりきっていた。

「は。説教？ 旦那の不始末の尻拭いも満足にできない女が偉そうに！」

（始めから無理な話と知った上で吹っかけて、反応を楽しんでいたのでしょうか!!）

地元と距離があるとはいええ、このような店で働いては、事が露見した時に宿の評判
が落ちる点に違いがないではないか。

再度怒声を浴びせたくなくなったが、一方でナミの言葉を負い目を持って受け止めてい
る自身の心境にも、真弓は気づかされていた。

我が身を犠牲としきれていないのは、紛れもない事実だ。

（護さんのために、私自身の身体を犠牲にする。でも、それで本当にいいの？ 真実
を確かめもせず、夫以外の人に身を任せるだなんて……それこそ、護さんを裏切る事
になるんじゃない……）

ナミに脅迫されて以来幾度も繰り返し自問自答した、難題。結局今の今まで、結論

を出せずにいる。

——駄目だ。お互いに頭に血が上った状態では、不毛な罵り合いが続くだけ。悩ましさに呻いた分だけ先行して、女将の頭がクールダウンし始める。

「……ひとまず、場所を変えませんか？ ゆっくりできる所で話し合いましたよ」

周囲を見渡せば、遠巻きに好奇の視線を寄こす野次馬の数も増えつつあった。お互いに、注目を浴びる事は望んでいないはず。そう思えばこそその進言だ。場所を変える事が気分転換の契機になればなおいい。

（あと半日。たった数時間を乗り切れれば、護さんが帰ってきてくれる。そのために、今日まで四日間堪えてきたんじゃない……あと、もう少しなのよ）

ここまでの労苦を水泡に帰してなるものか。苦悩を滲ませつつも穏便に言葉を選び説得に転じた女将の顔を、ナミは不満げに見つめ返すばかりだ。

「……もういい。面倒臭いよ、あんた。もう、バイバイねっ」

「ま、待って！」

不貞腐れて去ろうとする少女の手首を、真弓の手が咄嗟に掴み、引き留める。焦りにせつつかれての行いが、いつそうナミの逆鱗に触れた。

「触んなよっ！ ばら撒いて、言いふらす。もう決めたの！」

乱暴に手を振り払われた拍子に足がもつれ、真弓が地べたに尻餅をつく。

「きやつ……うう」

「ハッ！ デカケツでバランス悪いから、そうやってすつ転ぶんだよ」

暴論をぶつけて少しばかり気が晴れたか、ナミが嘲笑した。コンプレックスを刺激された女将が言葉を失くし、羞恥の表情を俯かせる。興味本位で集まった野次馬の中には囁し立てる者も出始めていた。

（お尻が大きい事なんて、私が一番よくわかっているわよ！ ……でも今は悔しがつたりしている場合じゃない。早く、彼女を連れて場所を移さないと……。でもどうやって。どうすれば、連れ出せるの？）

尻に注がれる衆目の視線を意識し、焦るほどに足がもつれ、立ち上がれなくなる。腰を浮かせては尻を地べたに打ち付けてを、三度繰り返してしまった。

「待って、ナミ、さんつ……」

再び芽吹き始めた弱音を唇ごと真弓が噛み潰し、初めて少女の名を口にした直後。

「——おお？ 真弓さん。どうしたね、こんな所で」

予想だにしなかった人物の声に呼び止められた。

「堂……本……さん？」

頭頂部の禿げ上がり帽子で隠し、両眼をサングラスで覆った中年男性。でっぷり張ったビール腹の主の名を、真弓は呆然とした面持ちで呼び返す。

ブランド物のシャツとストラックス、高級腕時計を身に着け、貴金属を幾つもぶら下げた男の様は「成金」という言葉のイメージにぴたり当てはまる。

駅のある方向から歩み寄ってきた彼は、真弓の前に着くなり、ニッと金歯を覗かせて手を差し伸べてくれた。

あまりに突然の顔見知りの登場に、真弓は手を取る事も礼を言う事も忘れて、ただただ茫然とした顔を彼とナミに差し向けてしまう。

野次馬の視線もナミの睨みも受け流し、張り付いたように笑みを崩さない男の名は、堂本キヨシ。若桜旅館と同じ組合に属する、新興ホテルチェーンのオーナーだ。一見冴えない風貌に思えるが、サングラスのふちから覗く眼光は五十路間近とは思えぬ獐猛さを備えており、やり手経営者との評判に違わぬ狡猾さをも窺わせる。

「んだよオツさん。邪魔する気？」

「ん？ まあ、ここは一つ穏便に……な？」

突然の乱入者の登場に目くじらを立てていたナミの表情が、手を握られた途端にコロリと変わった。キヨシの両手に一度包み込まれてから解放された彼女の手の内に、

紙幣の束が握られている。

「ど、堂本さんっ……それっ……」

金で懐柔したのか——!? 驚く真弓が眼を瞬き、再度紙幣の存在を視認しようとした時には、すでにナミの背は群衆の中。金髪のウェービーヘアを靡かせた少女の後ろ姿は野次馬に紛れ、すぐに見えなくなった。

話がこじれた状態で別れる事となった真弓は、気持ちの整理がつかぬまま。へたり込んだ尻を持ち上げる事も忘れ、茫然とナミが消えた方角を見やる他ない。

「さ、どうぞ」

堂本の呼びかけによって我に返り、まず真つ先に胸に生じた感情は——羞恥。十年の離れた娘との口論の果てに尻餅をついた情けない姿。みつともないところを見られたという恥じらいから、真弓はまともに堂本の顔を見る事ができない。

「あ……っ。だ、大丈夫です。自分で立てますから……」

眼前へと差し伸べられた男の太い手は、遠慮しても引く気配がない。仕方なくおずおずと触れて引つ張り起こしてもらおう。

「あの、助かりました。どうも、ありがとうございます」

立ち上がるや真弓は深々と頭を下げ、動揺の抑制に努めて感謝の言葉を口にした。

「いや。大した事はしてませんよ。しかし、珍しい場所で会ったものですなあ。先程の娘さんとの口論といい、一体何があつたんです？」

謙遜しつつも無遠慮に、堂本は率直な物言いで首を突っ込んできた。

引いたその分だけ、踏み込んでくる。そうしたところが、ナミと似ている。助けてくれた相手に失礼だとは思いつつも、胸の内に警戒心が広がるのを真弓は知覚していた。

彼が、絶えず悪評の付きまとう人物だからだ。

堂本は自らが経営するホテルに若い女性のコンパニオンばかり集め、地元の地権者や政治家を相手に、風俗紛いの接待をしている。それも毎晩、毎夜だ。

真弓自身、地元の名士と若い美人女性が恋人のように連れ立って堂本のホテルから出てくるところを幾度も目撃していた。

その手法の甲斐あってか現在では若桜一の規模を誇るまでに彼のホテルは繁盛しているが、正直、見習いたいとは欠片も思わない。

加えて、二度の離婚歴が示すように、堂本には性に纏わる悪い噂も絶えなかった。従業員の中には手籠めにされ泣かされた女性もいるらしい。実しやかに語られる噂の信憑性を高めているのが、彼のホテルに勤める者の離職率の高さであり、その内訳の

大半が女性であるという事実だ。

「どうも、よほどの悩みを抱えておられるようですね」

真弓が黙り考え込んでいたのを勝手に解釈して、堂本が頷く。

「人に話してすつきりするという事だつてある。どこか落ち着いた場所で、お茶でも飲みながら……どうです？ 私で、務まるかどうかはわかりませんが」

若桜旅館とは正反対の経営方針と、性に纏わる噂。二重の理由で元より好印象を抱いていない上に、先程から注がれる彼の視線が気になって仕方がない。ねめつけるようなその視線は、獲物を飲み下す直前の蛇のそれを思わせ、不安を煽る。

「お気遣いいただき、ありがとうございます。ですが本当にもう大丈夫ですので……。後旅館を長く空けておくわけにもまいりませんので、今日はこれで失礼いたします。後日改めてお礼に伺わせていただきますので。本当にどうも、ありがとうございます」

入浴剤混入の疑惑映像をネタに強請^{ゆす}られていたなどと、無関係の他人に明かせるはずもない。これ以上の引き留めを避けるべく精一杯の笑顔を形作ってみせ、堂本の安心を誘う。その上でやんわり断りの意思を伝えた。次いで再度、腰を折る。

堂本のおかげで上機嫌に去っていったナミだが、今度どういった行動に出るかは不透明だ。脅迫を続けるつもりなら、今夜も宿に戻ってくる可能性は高い。不安が全て

払拭されたわけではないのだ。急ぎ旅館へ戻らねばという思いも強く、若女将の心をせつつく。

(早く帰りたい……。もうじき、護さんも帰ってくるんだから)

脅迫者への警戒と、五日ぶりに会う夫の出迎え。正反対の性質のようでありながら密接に絡む二つの思いに囚われ、真弓は堂本の目を見て三顧の礼をし、背を向ける。

ゆえに、気づけなかった。逸りと焦りに蝕まれつつも足掻く若女将の心根を見透かす、中年男のいやらしい表情にも。早足で駆ける事で揺れる着物越しのヒップに釘付けの、好色な視線の追尾にも――。

4

――まるで綿の上を踏み締めているような不確かな感覚が、全身に波及していた。

「真弓……」

「護、さん……?」

霞みがかかる脳裏に響いた最愛の人の呼びかけに、反射的に応じる。瞬いた両眼の真正面に、いつも通りの柔和な表情をした夫の顔。彼はなぜか一糸纏わぬ姿をしている。

「ど、どうしてそんな格好しているの。早く……その。何か、着てください」

あなた、いつ戻ってらしたの。用意していた言葉に先んじて、強い羞恥に見舞われる。頬染めて視線を逸らしつつ着衣を促す妻の顔を、夫は不思議そうに見つめ返すのみ。服を着る気配は一向にない。

そしてさらに混乱を誘う言葉が、彼の口から発せられた。

「だって服着てちゃ、できないだろ？ それに、ほら。真弓だって似たような格好してるじゃないか」

「えっ。……あ……!!」

促されて、我が身に視線を落とす。眼には、全裸の女体が敷布団の上に横たわる姿が映し出されていた。

「近頃忙しくて、できなかったもん……子供欲しいっていう真弓のお願い、なかなか果たしてあげられなくて、ごめん」

状況が呑み込めずに狼狽え恥じ入る妻を、優しい目で見つめたまま。夫は心底申し訳なさそうな顔をして、頭を垂れてしまう。

「あ……うん、気にしないで。護さんが頑張ってくれてるの、わかってるから」
毒気を抜かれたように、妻の方からも劳いの言葉をかけ返し。

（たしか……ひと月ほど前に、同じ話をした……：……ような）

リピート再生されたみたいに一言一句同じの会話内容に小首を傾げていると、急に、あたかも場面転換したように眼に映る光景が変わった。

夫の手でいつの間にか開かされた両脚の付け根。剥き出しの女陰と目と鼻の先に、護の顔が迫っている。

「ま、護さん。待って、そんなに顔近づけたら、は、恥ずかしい……」

デリケートゾーンの処理をしたのはいつだったか。日中歩き回った後だけに、汗の匂いがかもっているのではないか。懸念が駆け巡り、焦りと恥じらいいに見舞われる。

護に恥部を間近で視認される事自体、初めてだ。惑い、動転した末に、覆うものがない股根を包み隠そうと両手のひらを浮かせかけ。

「駄目だよ、隠したら。僕のを挿入する前に、きちんと濡らして、受け容れる準備を整えておかなきゃ。そうした方がずっとお互いに気持ちよくもなれるんだ」

言い含めるような夫の言葉に制止された。行き場を失った腕は彼の手に捕まり、敷布団の上で押さえ込まれてしまう。

「触るよ……真弓」

珍しく強引な護に驚くと同時に、従う悦びを覚えた心根が躍る。

「だ、駄目。ン……………！　ンア、ア……………アアッ！」

女陰の割れ目を指腹でなぞられた途端、痺れ伴う疼きが腰から背に突き抜けた。ひと撫で、ふた撫で。回を連ねるたびに羞恥は薄らぎ、その分切々と快楽が身に響く。

（ああ、凄いわ……………全身が痺れたみたいで……………気持ち、いい……………でも、これって、いつ……………？　こんな風に、私……………護さんにしてもらった覚え……………ない……………）

幸福に浸る一方で、身に奔る恍惚が強まるほどに違和感が無視できなくなる。

夫婦の時間。夫は妻に「どうして欲しい」かと問うてから愛撫を施すのが常だった。羞恥心の人一倍強い妻の側から「股をさすって、愛でて」と申し立てた事は一度もない。妻の望まぬ事はしない彼の手指で女芯を愛でられた経験はないはずなのだ。

（そつ……………か。これ……………夢ね。だから今夜に戻るはずの護さんがもう、いてくれていつも以上に……………）

巧みな手つきで女の心身をくすぐり、愛でてくれる。指の感触もいつもと違いゴツゴツとしていて、内腿や女陰によく摺れる。その都度切なさに満たされる心と身体のはしたなさも、夢の中であるのなら納得だ。

（本当にはしたくない女だわ、私。こんなイヤらしい夢を見るなんて。護さんがいない間、寂しかったから？　それとも昨日、大浴場で絡み合うナミさん達を見たせい？）

違う、そうじゃない——俯瞰する別の自分が、連なる言い訳を否定する。

欲求不満。根が淫乱。ナミの指摘は正しかったのではないか。夢の中だからなのか、本来であれば認めたくないものを受け容れようとする自分がいた。

「奥からじわつと、染み出してきてるだろう？」

「え、ええ。奥から……くう、ンツ、あ、はああ……」

身体の反応についても、そうだ。認めて口にする事で、興奮が増す。

夫の手でめくられた陰唇の狭間。ペニスを受け容れるために設けられている穴の奥底から、温かな汁気が滲み出てくるのを実感する。羞恥はまだ強く残っていたが、それがかえって情欲の昂りに貢献していた。

かねてより希望していた子作りのための交合。その前準備として、愛しい人が愛撫してくれている。喜び以外の感情を抱く必要などあるものか。

(そうよ、夢なんだから、とことん幸せを……気持ちよさを嘔み締めて、いいの)
己を納得させる言葉を並べ立て、身に溜まる恍惚に耽溺する。

「腰、少し浮かせて」

「こ、こう？ これで、いい？」

夫婦二人きりなのだから、そして、夢の中の出来事なのだから。虚構ゆえの安心に

支えられ、日常では取り得ない大胆さを披露する事にも躊躇を覚えなかった。自ずから腰を浮かせて彼の鼻先へと近づけ、スンスンと嗅がれては再度の羞恥悦楽に打ち震わされる。

「とつても濃い、真弓の匂いがするよ」

「言わないで……。恥ずかしくて私、わけがわからなくなってしまいそう……。ひゃっ、あ、っひいッ……」

ズズ、と啜る猥褻な音色に続いて、電流の如き勢いで喜悅の痺れが迸った。夫の唇が陰唇に吸い付き、滴る蜜を啜り飲んだ——そういった状況認識が、快感に遅れて訪れる。

（ああ。素敵よあなた。もつと、して——）

愛される喜び。与えられる悦び。心も身体も満たされて、抱いていた不安や恐れが失せゆくのを実感する。まるで親に甘える赤子のように純粹な心地で、ただひたすらに幸せな夢に酔い痴れてゆく。

覚めないで、至福の時よ、もつとずつと長く続いてちょうだい——。乞い願うほどに、体感覚醒し、夫の顔がぼやけ、遠ざかっていった。

（嫌。まだ、現実に戻りたく、ない。もつと気持ちよくなりたいの……）

夢幻にすぎる心情を裏切って、肉体は目覚めの時を迎えようとしている――。

5

「う……ん」

瞬いた視界一杯に映り込む、見慣れぬ天井。背中心地から、夢の中同様柔らかなシーツの上に身が横たわっている事も認識した。後頭部にはよく沈み込む枕の感触がある。まだぼやける瞳で見下ろした自分の身体は、上着をいつ脱いだのか、下着の上には長襦袢一枚のみ羽織る格好となっていた。

(……寝ているのだから、当然……よね。でも……)

脱いだ記憶のない事が、引っかかる。

夢の内容が内容だっただけに、まだ引きずっているのか。目覚めた直後だというのに身体がひどく火照っていた。内側から炙られているような感覚に囚われて身じろぎ、股根に奔る切ない衝動に意識が向く。

「や、だ……濡れて……」

身の内から染み出た蜜汁で、ショーツが湿っている。知覚した途端に溢れた羞恥に

煽られて、さらなる恍惚の疼きが真弓の股根に奔った。次いで、疼きの根源たる股間に目を向けようと枕より浮かせた頭部に、ズキリと強い痛みが轟く。

「いつつ！ あ……」

立ち眩みに襲われて、わずかに浮いた後頭部を再度枕に押し付けた。頭痛の理由を、起き抜けでまだぼやけている脳裏で懸命に考える。

「ほっほ。ようやく眠り姫がお目覚めだ」

まだ夢現ゆめうつを行き来する若女将の耳に、上ずった中年男の声が届けられた。

「……っ!!」

瞬時にして夢心地から覚め、上半身が跳ね起きる。そうして恐る恐る、信じたくない一心で視線を向けた、真弓自身の股座の向こうに——彼、堂本の顔が在った。

蛇を思わせる中年男の視線と交錯した瞬間、シートに沈む背に怖気が奔る。起き抜けの頭にもはつきりと響いたそれは、卑しく緩んだ堂本の容貌に対しての生理的嫌悪感に他ならない。

「痛う……っ!」

怯えた視線を向けた先で醜くニタつきに出迎えられ、慌てて飛び起きようとした脳裏に、またも鈍痛が轟く。その痛みが幸いにも——といって良いものか、怖気を束の

間凌駕する。また、「頭痛に苛まれたおかげで、幾つか、ここに至るまでの事情を思い出せました。

頭痛の理由は、飲酒だ。旅館へ戻るべく駅へ向かおうとした矢先に、強引に堂本に引き留められたのだ。

（お茶でも、つて言っていたのに……）

腕を取られ、引き立てられるようにして連れていかれたのは、薄暗い店内。堂本が行きつけだというバーだった。そこでもやはり強引に、よくわからない酒を勧められ（遠慮しても、「飲んだ方が楽になる」だとか「全部胸の内を吐き出してすっきりした方が良い」だなんて唆^{そそのか}されて……ほとんど無理矢理に杯を傾けさせられて）

三杯目の途中から、記憶がない。ここまですが真弓が覚えている限りのいきさつだ。それがどうして、堂本が股座に顔を埋める状況に至ってしまったているのか。

「フフ……目が覚めたからか、いつそう股座の匂いも濃くなってきよったわ」

上品なレース生地の下着越しの股肉。その柔らかさと弾力を確かめるように、堂本が埋めた鼻先をグリグリ押し当ててくる。

覚醒直後の身体には酷な快楽衝動が渦巻き、腰が真弓の意思に反して震えだす。

その一方で胸中に敷き詰められた嫌悪感がよりいっそう高まり、眩暈めいた感覚に

襲われた女将の肉体は、怖気による震えも併発していた。

「ど、堂本さんっ！ 頭をどかしてくださっ、あいつ、あ、あぁッ……！」

両肘を立て上体を起こした真弓のおの慄きの視線を無視して、ピチャピチャと卑しい水音が響き渡る。音の出所は、堂本の舌と女将の穿く薄緑色のショーツの接地点。湿った股布の中央、くつきり浮く縦筋に沿って堂本の舌が這い、たっぷり含めた唾液を染み込ませてきた。

「ひあ……っ、や、やめてっ。あ、ひっ、嫌っ、堂本さっ、んひいいっ」

男の舌が行き来するたび、薄布越しの股肉が喘ぐように蠢いてしまう。的確に女陰の割れ目を舐る舌の、ねっとりとした熱気に当てられて、負けじと火照りを孕んだ女芯が疼く。

「酔い潰れてしまったあんたを介抱するつもりで、このホテルに入ったんだがね」
卑しい音を響かせてショーツの内より染み出た汁を吸った、その口が告げる。

「ひあ！ あっ、あ、あぁあ……っ！」

悶えた美尻がシートを引きずり、ベッドも軋む。漏れ出かけた嬌声を喉元に押し込めるので手一杯の真弓には、卑しい腰のくねりを気にかける余裕もない。焦りと驚きと恍惚と。諸々の感情で混雑する脳裏に、男の発した一つの単語が残響する。

(ホテ……ル!?)

慌て狼狽えながら室内を見回せば、不必要に豪華な装飾に、キングサイズのベッド。遠目に、透けたガラス張りの浴室も視認できる。ラブホテル。性的交渉を行うための部屋だと、入室経験のない女将にも容易に想像のつく、淫靡な雰囲気、息を呑む。

「寝苦しかろうと着物を脱がせてマッサージュしてやっている内に、真弓さんが色っぽい声を出すもんだから。我慢が利かなくなってしまうってね」

「そんな言い訳、通ると思っ、いやっ、ア……もお、しゃぶらないでえっ」

白々しく告げながら、合間合間にショーツを下から上へと舐め上げる。男の強弱緩急の効いた舌技の巧みに翻弄され、操られたかのように女将の尻がぐねり、シーツを振った。

最初からこうする事が、堂本の目的だったのではないか。だからあれほど執拗かつ強引に酒を勧め、無理矢理に酔わせたのではないか。疑念の数々が、酩酊の代償たる頭痛と股座の疼きに混ざりながら湧き起こる。

周囲の目を気にするあまり、執拗な誘いを振り切れなかった事。茶でもという言葉に、わずかながら気を緩めてしまった事。約束に反してバーに連れていかれた時、背を押され連れ込まれたにしろ、踵を返す事を「失礼か」と思い躊躇ってしまった事。

『あなたにそんな沈んだ顔は似合わないよ』

『ま、一杯だけ。肩の力を抜いて』

日々度を越して突きつけられるナミの脅迫に心が摩耗し、無意識に誰かの支えを欲していたのかもしれない。女癖の悪さを警戒していたその相手の話術にも乗せられて、洪々ながら首を縦に振ってしまった。一杯だけ。守られるはずもない誓いにすがりたくなるほど、心細さに震えていた。女の扱いに手馴れた堂本にすれば、鴨葱以外の何物でもなかったらう。

平常であれば絶対についていきなどしなかったものを——。次々浮かぶ後悔の念も、全て後の祭りだ。

痛感する真弓自身の不甲斐なさも、堂本に対する嫌悪までもが、股根より響く肉の悦に溶けて混ざり、被虐の悦へと変容していく。男の言葉と所業により発した羞恥にも煽られて、いつそうはしたなくショーツの内の陰唇が蠢いた。

「啜つても啜つても漏れ出よる。よほど、溜まっていたんだなあ」

「そんなこと貴方に関係なつ、ヒツ、いああはッああアアア！」

口答えは許さぬとばかりに、ショーツが力一杯引つ張り上げられる。股布がきつく食い込んだ割れ目の呻きを助長するように、男の手が恥丘付近を撫で回った。

引つ張られたおかげでハイレグ状となった下着は役目を果たさず、濡れて張り付く恥毛も、汁まみれの恥丘も、布が食い入る割れ目すらほぼ丸見えとなっている。その秘すべき部位を順次撫で繰られて、羞恥よりも先に痺れるような愉悅が奔った。

(起きて、逃げなきゃいけないのに。なのに、どうして——)

酔いに侵された上に肉の悦を注がれ続ける女体は、動きも鈍く、力がこもらない。特に下肢は、常に供与される舌と指の摩擦刺激に耐えるので手一杯の有様だ。足搔こうとするたびに真弓の手首足首は押さえ込まれ、股根に新たな煩悶が植え込まれる。

「眠ってる間も、舐るたびスケベな尻がくねっておったぞ？ 責任取ってワシが発散させてやらにや。今も、マ○コが疼いて堪らんだろう？」

わざと下卑た物言いで指摘する男の口元は、べつとりと濡れ光る汁をまぶしていた。それが自分の漏らした蜜だと認めたくないあまりに、ひと際女将の声に怒気がこもった。

「け、結構ですっ！ 早く手を、頭を離してっ……ひっ、ん！ ンン、あっああ！」

怯えて引けた腰を抱き寄せられ、指腹に擦られた股間が弾む。へそ奥に迸る快感は夢で夫に施されたのと全く同質の物。夢中の至福の中で覚えた快癒までもが堂本の手に握る物という残酷な事実を突きつけられ、女将の心が絶望に染まる。

「わしの唾液とあんたの愛液でぐっしよりだから、下着越しにもマ○コの形が丸わか
りだ。肉厚で突き心地の良さそうな、良いマ○コだぞ、真弓」

呼び捨てにされた。いつしか男の口調が上から目線の偉ぶったものに変わっている
事にも気づき、戦慄する。この男は私を嬲り、蹂躪する気である——。確信抱いた瞬
間から、カチカチと噛み合わぬ歯までもが怯えだす。

「ひっ、い、嫌……。許して……」

股下から覗く野獣じみた眼光と荒い息遣いからも察せられる男の欲情ぶりに、女の
芯が強かに打ち震わされている。怯えた言葉と裏腹。睡眠中に準備万端整えさせられ
た女体は煩悶し、卑しい疼きを止められないでいた。

劣情を隠さず押し付けてくる牡の圧力には敵わない——弱り切った心の片隅で諦め
にも似た感情が生じる一方で、なお残る不貞への抗いが、身の強張りとなって現れる。
それら全てを見透かした上で、男が嗤う。歪んだ笑みの浮いた唇から飛び出した舌
と、ごつい癖に器用に這いずる指先とが、真弓の心身を容赦なく責め立ててゆく。

「クリを抜いてやろう。ん……？ はは、皮を被って、可愛らしいものだ」

「はっ、離れ、んヒイツ!? ひっ、いつ、うあ、ひいア……ッ！」

恥ずかしがりのお前に似合いの包茎クリだ。そう告げて男の指がショーツの内へと

侵入し、手早く見つけた勃起豆を爪弾いた。

電撃のように鋭い痺れが腰の芯に突き抜けていき、女将の唇からひとりでに甲高い嬌声が滑り出る。息が、苦しい。早鐘のように鳴りだした胸の鼓動に押し出されたかのように、浮いた股の奥から熱い物が込み上げてくる。

「この過敏ぶり。旦那どころか自分でも剥いた経験がなかったか？ ワシがしつかり寝かけてやるでな。身体で覚え込むんだ。いいな！」

「あひつ、い、やあ……つ。覚えたくなつ……あぁ……つ、ひいんんツ」

ない——。喘ぎながら吐き出した想いは、声にならなかつた。代わりに、勃起陰核を指腹で捏ねられるたび響く恍惚の痺れが、嬌声となつて真弓の喉元より迸る。

「ほれ、逃げるな」

「んうっ?! ふあ、あ、あア……ッ！」

弾み浮かせた尻を捕まえられ、濡れたショーツごと揉み立てられた。急襲に驚き強張っていた尻たぶが、指が食い入るほど力を込めてほぐされるにつれ、小刻みな震えを放ちだす。それが性的興奮の証と知っていればこそ、堂本は機嫌よく言い放つ。

「肉厚でパンと張った、良い尻だ。いずれ、ここでもイけるように仕込んでやる」

「イ、ク……?」

言葉としては知っている。絶頂する、という意味だ。けれど実際に体感した事はなく、また、臀部でそうした状態になるという話は信じられない。

「なんだ、イッた事もないのか。こりゃあ、とんだ宝の持ち腐れだ。——すぐに味わわせてやる」

疑惑の目を向けられていると気づいた中年男が、下卑た顔をいつそう歪ませ宣言する。

懇願する間すら、真弓には与えられなかった。薄緑の股布をめくり、じかに陰唇へと吸着した男の舌先が、上下に舐りながら割れ目の肉を吸りだす。同時に勃起クリトリスが、ごつい指先によって押し潰された。

「いひやアアアツツ！」

舐られたそばからもたらされる切ない疼きと、捏ね潰された陰核にジンと突き抜ける重い衝撃。二種類の快樂衝動に炙られて、女将の腰のくねりがいつそう増す。襦袢の内に押し込められたままの胸が、切なさに呻いて解放を訴えかけてくる。

（こんな事、許されない。夫以外の男性に、肌を……股を晒して。イヤらしい真似をされてるのよ。嫌でないと、いけないの……。き……。もちいい……。だなんて。思っ
は、駄目……！）

孕んだ熱が、汗ばむ胸元、男の脇に抱えられた太腿、そして何より強く啜られる女
芯より放散してゆく。卑しい吸引音が響くたび、羞恥と恍惚と罪悪感とがない交ぜに、
股の芯から汁となつて溢れ出す。抗えぬ快樂の波を幾度も被り、理性という名のたが
が軋む。

「必死に堪えようとする様も、どうしてなかなか。そそる」

くねり蠢く女体を眺め、上ずり轟く嬌声を心地よく聞き留めた堂本が、愛液でヌラ
つく口端をペロリと舐めた。

「や、あはあつ……もつ、お、やめ……」

息も絶え絶え喘ぐ獲物の弱り様に満足して繰り返される、さらなる一手。

「ここも——」

堂本の左手中指が、ショーツの生地ごとグリリと、真弓の尻肉の谷に押し入って
く。肉厚の指の先端が、谷の奥底で縮まっていた窄まりの上に力一杯のしかかり。

「んうう……！ お尻は嫌、あつ……」

小気味よいリズムで捏ねられた尻穴が、卑しく開閉し、放熱する。ヒクつく排泄穴
の奥底から何か、卑しい汁が染み出てくる予感がし、女将自ら慌ててきつく締め付
けた。——それが、快樂の段を跳ね上げる引き金トリガとなる。

「はひいイイツ!」

機を見定めた堂本の舌が、汁濡れの陰唇を穿り広げ、割れ目の内へと突き入った。そして間髪容れずにジュールジュール、ひと際卑しい音を響かせての強烈な吸引。突き入る舌で膣肉を掻き混ぜるように擦りながら、染み出るそばから蜜汁を啜り飲む。

尻穴と勃起クリトリスへの責めも緩まない。前後含めて三点から同時にもたらされる肉の疼きに、逃げ場をなくした真弓の尻が跳ね弾む。その尻の肉を、力一杯掴んだ堂本の指が我が物顔で捏ね繰った。

「ひいっいイ、あつ、ああつ、あああゝゝゝつ!」

腰から脳天にまで、繰り返し突き抜ける強烈な愉悅。意識が白むほどの快楽衝動に貫かれて、女体全体が痙攣に襲われる。金切り声に近い大音量の嬌声が、室内に残響して延々男女の耳朵を舐めあやす。

（駄目、駄目駄目駄目えええつ! 漏れ、ちゃ……うううううつ!）

真弓の人生初絶頂は、解放感と極上の肉悦楽の只中で訪れた。

プシッ——膣の奥から噴き上がった飛沫が、割れ目に埋まる堂本の唇を直撃する。真弓自身は「お漏らし」と感じ、猛烈に恥じ入りながら、その羞恥を追加燃料としますます噴射の勢いを増させたが——。

「おほ。初イキで潮吹きとは。つくづく楽しませてくれよる。いい、実に良い！」
噴射液の正体を知る中年男は、嘲り混じりの称賛を浴びせてくる。

「ひやあつあひイイ！」

より獣欲に彩られた視線に侵されつつの、さらなる股間吸引に咽び泣かされた。すでに陶醉しきっていた女体に、怒濤の勢いで追加の肉悦が雪崩れ込む。はしたない己に対する自虐と、夫への懺悔を噛み締めた真弓の尻の肉が、ショーツから半ば以上こぼれた状態となり、堂本の手の内で弾んだ。

（嫌！ 怖い——！）

腰が、自身の制御を離れて飛び跳ね続けている。初めて味わう絶頂連鎖は、天井知らずの喜悦と同時に強い恐怖感情をも真弓の胸に植え付けた。痛切な背徳感にも責め立てられ、支えを欲した女の両脚が咄嗟に堂本の背にしがみつく。

「んうッ、うんんっ、うあ、あああはあああ……っ！」

吸られるたびぶり返し、その都度勢いを強める波状の肉悦楽に蕩かされる事、数分。真弓は堂本が求めるままに、嬌声と蜜を吐き漏らし続けた。

「初めての絶頂の感想は、どうだ」

「ひっ、あ……は、ああ、あ……っ、も、おっ……吸わなひっ、ふアうう！」

汗ばむ指腹で軽くなぞられただけで、真弓の腹部が痙攣を強め、腰を跳ね上げる。息も絶え絶えとなつてゐるために、返答もまともにできない。

(……こんな、激しい感覚……これが、イクつて事……なの?)

全身、四肢末端にまで波及した気だるい脱力感。重たくうな垂れた身体の内、未だくすぶる肉悦楽への渴望。卑しくパクつく股座からは蜜が垂れ滴り、それと同時に、腰骨に延々切ない衝撃が突き当たる。

夫以外の男の仕立てた悦びは強い中毒性を伴い、女芯を執拗に揺さぶり続けていた。
「……う、うう。ごめん、なさい……あなた……」

卑しく応ずる我が身の情けなさに落涙し、真弓がこの場にはいない夫への懺悔を口にする。胸を衝く罪悪感をしゃくり上げるその振動にすら感応して、余韻に溺れる淫尻が悶え疼く。

愉悦に縛られた女体は、ベッドシートの上で痙攣するばかりで、脱出のための力を込める事もままならない。股を閉じる事も叶わず、晒した局部に突き刺さる牡の視線を強烈に感じる。

涙滴る瞳をきつく閉じる事だけが、今の真弓に許された精一杯の抵抗だ。

「ではそろそろ、本番と行こうか」

目を閉じる一方で、視線に焦れた蜜まみれの股を揺する。そんな女の隙を、手馴れた男が看過しようはずもない。

手早く自らの手でズボンと下着を脱ぎ下ろした堂本が、再度女将の股座へと身を押し込めてくる。息切れに喘ぐ真弓が気づいた時にはすでに、下半身丸出しの堂本の手に両足首を掴まれていた。

「ひッ——!?!」

本能からの慄きに見舞われ、女将の口から引き攣った声が吐き漏らされた。

涙で震える真弓の視線が為す術なく見つめた己の股下で、反り立つ堂本の勃起ペニスと対面する。それは使い込まれてやや黒ずんだ、長大な生殖器官だった。

節くれ立った幹は厚みもあり、小刻みに脈打つ様が禍々しい凶器を思わせる。護の物はもちろん、昨夜に見たナミの友人男子達の物、どれよりも強く「牡」を意識させる、凶悪な造形をしていた。何より亀頭の、釣針の返しの如くエラの張った様が、まだ絶頂の余韻に咽んでいる女の心身に強烈に訴えかけてくる。

(こんな物を今、突き込まれてしまったら……あ、ああ………っ)

本番と、男は告げた。その意味するところを、鈍る思考に先んじて、疼きつ放しの女体が理解する。

「や、ああ……やめて……。それだけは……後生です、から」

怯えた声に呼応して、勇んで飛び跳ねる悪辣な肉槍。それが無遠慮に真弓の下腹部、ショーツ越しの恥丘に乗り上げ、二度三度存在感を主張するように脈打った。

「ひっ、嫌っ……やっ、ふあ、あ、あひいんっ……」

女陰の反応を楽しむように、堂本の腰が前後に揺らめき、肉幹がショーツの上を往来する。その都度怯えと摩擦刺激に悶える真弓の口から、短い喘ぎが吐き漏らされた。鎮まりかけていた絶頂の余韻が、全身の穴という穴から噴き出てゆく。怖気と快楽の混合した感覚に囚われて、女の腰だけが水を得た魚の如く左右上下に舞い踊る。

「入れねば、お互い満足できんだろう？」

「そんな、あっ、んっ、んううっ、擦るのやめっ、てええ」

熱く脈打つ肉棒の触れ心地からも察せられる。言葉通り、堂本は射精するまで満足しないだろう。

（でも護さん以外の人になんて……嫌。挿入されたく、ない……っ）

足掻く女心を嘲笑うように、堂本の手が再びショーツを引き上げ。はみ出た恥毛をくすぐるように勃起。ペニスが這いずった。

「ほれ、ほれほれ。股の口はチンポが欲しいと泣いてヒクついておるぞ？ 素直にな

れ、真弓。今よりもずっと気持ちよくしてやる」

「嫌、嫌、嫌ああ」

呼び捨てられた事さえ甘美に感じるほど。絶頂の余韻で火照り仕上がった女体が、芯から牡の剛直を求め疼いている。知らぬ間にまたショーツが脇に寄せられ、剥き出された膣口が切なげに喘ぐ様を、まざまざ見せつけられて真弓の目が泳ぐ。

「ふあつ、あ、ひいつ、ひいつ、んっ、んああはアア……」

今また割れ目をじかに扱かれて、蕩けた膣肉が肉幹へと吸着する。たっぷり漏らした汁気をまぶされた牡肉が、呼応して膣の唇を舐め掃いた。よじれたショーツが勃起クリを刺激して、絶えず切ない衝動を送り込んでくる。

「お、お口で。お口で、しますから……ソコは……お股は、許して……」

もう、これ以上の焦らしには耐えられない。直感めいた焦燥に駆られて、妥協案が口を衝く。

「ほう。しゃぶるというのか。しかし、どうせフェラも経験がないのだろう。拙い舌遣いでワシのマラを果てさせられるものかよ」

「一生懸命します、から……。教えていただければ、その通りにします」

生真面目女将の恥も外聞もない懇願は、それなりに男の気を惹いたらしかった。焦

らしの摩擦愛撫を一旦止めて、堂本の視線が思案するように上を向く。

（仕方ないのよ。これ以上擦られて、どうしようもなくなる前に、終わらせてしまわないと。口に含むだけ……。舌を絡めて舐めて、吸う。それで、済むのなら……）

自信など全くない。いかほど卑猥な指示をされるかの想像もつかない。それでも他にもはや手立てなしと覚悟を決め、操だけは守ろうと媚びた視線を男に振り向ける。

「堅物女将にチンポしゃぶりが務まると。ワシが出すまで舐ると誓えるか？」

「が、頑張ります……ふアツンッ」

肉棒の腹で、ぺちんと下腹部を打ち叩かれ、怯えた尻の肉と穴が窄む。屈辱の仕打ちにも耐え、なんとかこの場を乗り切ろうと必死だった。その足掻きを見越したように。

「——しかしやはり、こつちだな」

「……え？ やつ、ああ！」

ぐちゅ、と卑猥な音を立てて、龟头と膣口とが触れ合う。一縷の希望にすがりついていた心身に面映ゆくも切なくもある衝撃が突き抜け、真弓が目を剥いたのも束の間。

「そら、喰らえ……！」

大量の蜜で潤みぬかるむ膣口を、硬く熱い肉棒が突き破る。

「んひいああア……っ！」

貫かれた女の頤おとがが反り返り、押し出された金切り声が室内中に響き渡った。

(どうして——!?)

瞳に狼狽を残したまま口蓋をパクつかせる真弓の顔を見据えて、堂本は事もなげに言つてのける。

「あんたも、早く帰れた方が良いだろう」

表面上は笑んでいながら、少しの温かみも感じられぬ男の面を目に留めた途端。

「ひッ、酷っ……んっひィッ!!」

怖じたはずの女体の芯から、くすぶっていた快樂の余波が飛来し、膣内が蠢く。

「おうおう、もっと奥へと誘うか。このスケベマ○コめが」

「ち、違っ、ひっんぐうっ！」

ブヂュツと卑しい水音と共に、勃起ペニスが膣の深部へと押し込まれる。うねる膣肉は、肉棒の幹と擦れるだけで、絞れるほどの蜜汁を染み漏らす。引き攣り狭まる膣道を、エラ張り亀頭が掻き分け、こじ開けていった。

(ふ、太いい……無理矢理に掘げられて……苦しい、息が詰まっ、るううっ)

それに火傷しそうなほど苛烈な熱を孕んでいる。堂本の欲深さをそっくりそのまま

体現した肉棒の雄々しさに、触れるそばから膣粘膜が溶かされていくようだ。

へそ下辺りに居座った禍々しい異物感が、「犯された」のだという事実を嘆く女の心に執拗に突きつける。

「抜いっ、て……お願い、しますっ……。これ以上、もう………しないで」

腰骨を揺さぶる切ない疼きに苛まれながら、泣きだしたいのを必死に堪え、喘ぎ喘ぎ発した懇願。それも、ただ怒張の興奮を誘うのみに終わった。

「まだ全部は埋まっておらんが。まあ、徐々に馴らしてやろう。その方がお前も楽しめるだろうしな」

憎々しい響きの言葉に反論しようにも、間を置かずに男の腰が引き始め、封殺された。再来した摩擦快感に急かされたように、真弓の口腔からは唾と嬌声ばかり迸る。

「ひいいいあっ！ はあっ、ヒ……いはああっ、あんっ、んっ、んくっ、ううう！」

半ばまで引き抜かれた勃起ペニスが、小幅に不規則なりズムで抜き差しされ始める。膣壁の一部を執拗に扱き立てる堂本の腰遣いは、巧みに女体から二種類の劣情を引き出し、交互に掻き立ててみせた。

「上の口と違って、下の口は大喜びだな。グチュグチュのドロドロで、ワシのチンポに吸い付いて離れたがりよらんわっ」

小刻みに行き来された部位は肉棒の熱が映ったかのように火照りを孕み、亀頭に吸い付いている。他の部位は早く擦つてとねだるように蠢き、渴望のしるしたる愛液を漏らし続けていた。

「う、嘘よそんな事つ、おオツ、ンツツ、ンぐううンツツ！」

わずかに肉棒が沈み込み、一步先で渴望の蜜を漏らしていた膣壁を研磨した。腰を回す事で角度を変え、襲の一枚一枚を捲り上げ、丹念にエラ張り亀頭が擦りつく。

（無理矢理されてるのに、ジンジン響くのが、ああ、我慢、できないいいいっ）

待ちわびていた膣壁は、多量の蜜を含有する粘膜を引き締めて牡肉を歓迎してしまふ。温くぬめる蜜をまぶされた堂本のペニス嬉々として脈を放ち、その都度真弓の尻がシートを引きずりくねり回った。

（悔、しいっ——）

無理矢理にされているのに。男の意のままに動いてしまう女体が恨めしく、どうにもならない現状がただひたすらに強い焦燥を真弓の胸に孕ませる。

「ここが恋しかったのだろう？ んん？ ほれ、ほれほれほれえ」

「はひっいひいっ、ちが、ああああアアツ、私つ、わた、あひいひい！」

拒むたび執拗さを増して、肉の幹が膣壁を擦り立ててくる。じつくり前戯を施され



ほぐれきつた女性器は、どこまでも欲望に忠実だ。膣洞全体が収縮し、擦られた分の倍返しとばかり、肉棒をきつく食い締める。ぬかるみ滑る膣との摩擦に興じる堂本の目の色が変わり、尚更ネチネチと扱かれた膣の襞が悶え泣く。

「ははっ、やはり下の口の方が正直だな。なあ、真弓よ」

「い、嫌あつ！」

前のめりになった男の唇が己のそれに被さろうとしている——。直感的に察した真弓の顔が横を向き、接吻を拒否された男の腰が膣の深部へとまた一步、沈み込む。

「ンぐッ、ああはッアアア!! な、に……何いいいつ!!」

丸みを帯びた亀頭が、膣の上壁を抉るように突いた瞬間。これまで以上に苛烈な痺れを注がれて、背が反り返り、盛大に腰が跳ねた。同時にきつく引き攀れた膣肉の狭間で、牡勃起がより小刻みな脈を放ち始めた事にも気づかされる。

「そこか……! 真弓、お前のGスポットをみっちり磨いてやるからな。もう、すぐだぞ。いいか、真弓。一緒に、イクぞ。真弓イイツ！」

吠える堂本の言葉の意味を、喘ぎ悶える牝肉の主が理解する事はなく。

「んう! はっ、ヒイイツ、イあッ、んふうう……っ!」

間を置かず速まった男の腰遣いに圧され、ひたすらに甘く蕩けた声が漏れ出てゆく。

膣とペニスの結合部からは、突き回されて泡立った蜜汁が次々に掻き出されていた。筋状に内股を滑るその汁の甘酸っぱい臭気が、男女の性欲をより煽り、各々の腰の動きを止め処なく活発にさせる。

膣の上壁、粒状の感觸の集まるGスポットを擦り立てられると、尿意に似た切迫した感觸が溢れ、強烈な恥辱に侵された。同時にゾクゾクと愉悅伴う強い痺れが、腰奥を始点に女体全身へと駆け抜けてゆく。

（ゴツゴツしたものが擦れてる。先っぽの、エラみたいな部分が引つかかってゴシゴシ、摺りついてきてえっ……こんなの、知らない……！　こんなっ——）

乱暴なようである確に女の弱点を貫き通す堂本の技巧に、身体はもう陥落寸前。——心が認めたがらないだけで、すでに堕ちてしまっているのかもしれない。刺激に誘

小突かれるたび、大量の蜜が膣内のそこかしこから染み出すのを感じる。刺激に誘引された子宮の口が、あと少しで牡の突撃を受ける位置にまで下りてきてもいた。

「イクぞ——いいな！」

冷淡に響く男の言葉。それが号令である事と、次なる一撃がとどめとなるだろう事を理解して、慄いた心と裏腹、牝尻が弾む。跳ねた臀部を男の手で揉み潰された直後に、ひと際強い肉衝動の波が女芯を襲撃した。

「やはあつ、わたつ、ひイツ——」

意識が白む感覚。覚えたばかりの絶頂の前触れを、一度目よりもずっと怯えの薄らいだ状態で受け止める。子宮の口にキスされた——そう自覚した瞬間に、昂ぶりきつた状態から降りてこられなくなった。

「はヒッ、ア……ッヒイあああ——……ッッ！」

目一杯腰を突き入れた堂本の中年腹が真弓の股座と密着し、互いの震えが同調する。腰を回して子宮口を捏ねたのと同時に、彼の手指が尻の谷を掴んで広げ、縮こまっていた窄まりをも弄くり撫でた。

（お尻嫌なのにつ……。ああ……もう……何も考えられなく、なるうう）

男の爪先に搔かれた肛門がギュッと引き締まり、内に生じた菌痒い痺れを飲み下す。連動して下腹も引き攣り、膣壁が牡勃起を締め上げる。色欲に盛った男女の視線が交錯し、息を合わせて互いの腰を震わせ合った。

「ぐう……っ、出すぞ！」

ひと際強く打ち叩かれた子宮口が吸い付くのを振り切って、勃起ペニスが膣洞を遡る。勢いよく扱かれた膣壁が引き攣れながらすりつく。それすらも振り払って、ブポッと卑しい音と共に脱出した肉の棒から、大量の白濁液が迸った。

「ふやつああああ！　うあ、あッ……ッツ!!」

栓を失った途端堰を切つて噴出した肉の快樂に支配される真弓の腹部が波打つ。その真上、へそ周りに間髪容れずに白濁液が降り注いだ。飛来するなりベチャベチャと附着する子種汁の粘り氣と臭みとに、眩むほどの肉悅樂が再来する。

(熱、い……いいつ、お腹の内も外もおつ……)

臉の裏から白みだす視界を瞬かせ、實際はさほどでもないはずの精液の熱を、より強く受け止めた。牡の欲情の程を知らしめるような強烈な熱氣——火照り狂った女体がそう捉え、喜悅の塊が再度、背を伝い胸へと突き上げられてくる。

(イクう、またつ、イクうううううつ!)

痙攣する下腹部に恍惚の痺れが続けざまに駆け巡り、望まぬまま真弓は三度目の絶頂を迎えた。降り注ぐ牡の熱に浮かされたように、膣内に茹だる火照りが蓄積されていく。連続絶頂の影響か、やたら長引く絶頂の余波が女の芯を刺激してやまない。

「つは、ふうう……良い、具合だったぞ真弓」

射精を終えた男性器がゆるゆると、すでに汁だくの女体の腹に擦りつき、竿の内に残る分まで絞り出す。初弾に比べ随分と勢いの削がれたその振動、微かな余熱にすら過剰反応して、膣が痙攣した。

開いたままの膣奥より粘度の強い蜜が染み出すのを見て、堂本が心底嬉しげに目を細め。一度は鎮まっていた彼の手指が、尻に下腹、陰唇と、所構わぬ愛撫を再開する。「ひんツッ！ ふあ、あ、あふああ……今つ、触れちゃ駄目ええつ……！」

ゴツゴツした指がしつこく撫でたり穿つたりを繰り返すせいで。自分の身体が欲しているのではない。幾つ言い訳を連ねたところで、ギッチリ引き締まる肛門と、喘ぐようにヒクつき続ける膣口。あからさまな肉体の感応が男に筒抜けだ。その事実が何よりも強く、真弓の摩擦した心根を痛めつけ続ける。

（違、う……違うの。私は、そんなはしたない女なんかじゃ、ない……）
やがて、徐々に絶頂の波が引いてくる。陶醉感が薄れた分だけ隙間の生じる心に、踏みこじられた悲しみと怒りが戻ってきた。

「……昼間に口論していた少女の事は、こっちでなんとかしてやろう。だから、な」
皆まで言わずとも男のギラつく目が雄弁に告げている。今後も肉体関係を結べ、その代価としてナミの事は対処すると――。

「そんな事……！」

下衆な提案になおのこと憤怒が沸き立つ。シーツを手繰り寄せ、まだ脱力した状態の肢体を包み隠しながら、拒否の意思を視線と舌に乗せて吐き捨てた。

「ラブホテルは、中で問題が起こった時用に、各個室に監視カメラを設えるのが当たり前でね。ここの経営はウチだ。ワシが言えば、いつでも映像は持ち出せるんだよ」

男は待つてましたとばかりに嬉々とした表情で、隠し持つていた手札を提示する。
——脅迫。終わらぬ地獄の連鎖に絶望し、真弓は続く言葉を失った。

「取引もまとまったところで、早速続きと洒落込もうじゃないか」

黙りこくつた女将の態度をこそ返答と捉えての勝利宣言。間を置かず再び摺り寄つてきた堂本の手が、真弓の裸身を覆うシートにかかり、引き剥がす。

「い、嫌。もう嫌あつ！」

一度出ただけでは満たされぬと、けたたましい脈を打ち、なお硬度と角度を保つた肉棒に女の視線が行きつき、息を呑んだ。

（どうして——あんなにたくさん、拭いても拭いても臭いが取れないくらいにたくさん、吐き出したじゃない——！　なのにどうして、まだそんなに元気なのよ！）

「ふふ、利口なあんたは、嫌がつても逃げやしない。わかつているよ」

彼の手元に不貞の現場証拠がある限り。どこにも逃げる場所などありはしない。

（わかつてる。でもっ！　ああ……もう一度あんなのを味わったら……）

再度熱く猛つた牡肉を突き込まれれば、自分の心と身体がどうなるか。見当もつか

ない事が何よりも恐ろしい。

「んぐうっ……ふあ、ああ……！」

再びズブズブと、無遠慮な熱棒が突き入ってくる。すでに丸裸の膣内を我が物顔で往来し、好き放題に擦り立てては、雄々しく鳴く。丹念に、互いの汁と熱とを摺り込むように亀頭と子宮口がキスをした。

「ひっ、あ、あああ——……ッッ！」

掠れだす真弓の嬌声を心地よく聞き留めながら、尻を掴んだ堂本の手指が再び肛門へと押し当たる。

「うう、お尻は、もう嫌ああつ……」

拒むほどに締め付ける肛穴と膣のうねりとを心行くまで堪能し、男は本日三発目となる精を真弓の腹上へと解き放った。

6

堂本から解放された真弓が若桜旅館へと帰り着けたのは、空がすっかり闇に覆われた午後十時過ぎの事だった。

自宅へと戻る道すがら立ち寄った旅館ロビーで宿泊名簿台帳に目を通し、真弓はナミ一行がすでに宿を去っている事を知った。

（あの人、堂本さんが早速手を回したのか——）

あるいは昼間に堂本から受け取った金で満足し、去っていったか。いずれにしろ、今後堂本に恩を着せられ続ける事に違いない。ふてぶてしくも狡猾なああ絶倫男は、不貞の証拠映像と併せて肉体関係を迫ってくるだろう。

（今晚だって、何度「やめて」と頼んでも腰を止めてくれなかった。終いには、失神まで……させられて）

連続絶頂に咽び泣いた女体が弛緩しきり、腰を振れなくなるまで突き上げられ続けた。涙が枯れて、掠れた甘い声しか吐き出せなくなっても、やめるどころかますます獣欲を漲らせて、子宮を捏ね突き上げてきて——最後の方は意識朦朧状態で、ほとんど記憶に残っていない。

「……っ」

回顧するだけで胸が詰まる。夫への申し訳なさと、迂闊だった己に對する悔恨。そして注がれ続けた肉の悦楽によって、我が身が変えられてしまったのではないかという不安、恐怖。雑多な感情に苛まれ、今にも心が押し潰されてしまいそうだ。

「おーい、真弓！ お帰りー！」

「護……さん……っ!？」

悩みの一端と、支えとしての役目を担う最愛の人の声が届いた瞬間。混乱する胸に芽生えた感情は——怯えだった。今の自分がどんな顔をしているのか、笑って夫を迎えられているか、わからなかったから。

「ずいぶん遅かったね。待ちきれなくて、ここまで出てきちゃったよ」

幾日ぶりに見る彼の笑顔も、声も、記憶の中にあるそれと寸分違わず同じであるはずだ。なのに。

「真弓？」

彼の表情が疑心に駆られているように思えるのは、自分自身がそうだからだ。彼の声に硬い響きがあるように思えたのも、この胸に巣食う怯えが原因。その、はずだ。

「大丈夫かい？ 目の下が、腫れてるように見えるけど」

会って聞きたい事、話したい事が幾つもあったはずなのに。どれ一つとして言葉にできなかった。混乱しているせいか、疲れているせいか。すでにどれも手遅れの事ばかりと、わかっていたからかもしれない。

「……ありがとう」

心配してくれてありがとう。出迎えて、傍に来てくれてありがとう。幾つもの想いを込めたはずの言葉は、真弓自身の耳にもひどく平坦な響きと感じられた。

「……っ」

堂本の手垢で汚れた肢体をこれ以上夫の前に晒してはいたくない。

「お、おい、真弓？」

「汗、搔いてしまつて。急いで帰つてシャワー浴びちゃうね」

心配した夫が手を繋ぎたそうに視線を寄こしてきていた。だから、先手を打つて一人小走りに駆け出し、距離を取る。

「待ってくれよー！」

追ってくる夫の声が愛おしくて、よつぽど振り向きたい衝動に駆られもする。それでも乾いた瞳からは何も——嬉し涙も悔し涙も、こぼれてはくれなかった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>